

## アドルフォ・ニコラス 前イエズス会総長 葬儀ミサ

2020年5月23日 カトリック麹町聖イグナチオ教会

<https://www.youtube.com/watch?v=Lru3PI9Cr9U> 1時間21分26秒

### 葬儀ミサに先駆けて ソーサ 現イエズス会総長の言葉

私は、ここに、アドルフォ・ニコラス神父が亡くなられたという悲しいお知らせを皆さんにお伝えします。十字架につけられ、復活された主に続いて、彼は、今は、神のいのちを受けています。アドルフォ神父は、主が、語りかけられている言葉を聞いていることでしょう。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、私が飢えていた時に食べさせ、喉が乾いている時に飲ませ、旅をしている時に宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれたからだ。」(マタイ 25:34~36)

アドルフォ神父は、アジア太平洋地区では「ニコ」と呼ばれていました。次のような「永遠の王の呼び掛け」を聞いたのでした。「私と共に来たい人は、私と同じ食事、そして同じ飲み物、衣服などで満足しなければならない。また、昼は私と共に働き、夜は共に寝ずの番などをして働かなければならない。こうして、私の労苦に与ったように、私の勝利にも与かるだろう。」(霊操 93 要点第2)

ニコラス神父は、1936年4月29日にスペインのバレンシアに生まれました。1953年9月14日にイエズス会に入会し、日本管区に送られ、養成を終えました。1967年3月17日に司祭に叙階され、その後、神学教授、神学院院長、そして管区長など、様々な要職につきました。また、東京に住む外国人移住者のため、社会司牧の奉仕をしました。さらに、はじめは、東アジア司牧研究所(EAPI)の所長として、その後、アジア・オセアニア地区管区長協議会の議長として、10年にわたってフィリピンに住みました。2008年1月19日にイエズス会総長に選ばれ、会の発展に寄与しただけでなく、修道生活全般と教会の向上に多大な貢献をしました。それを、彼独特のスタイルで、すなわち、常に温かみと、善良さ、そして喜びをもって行ったのでした。2016年にイエズス会第36総会で辞表を提出したのち、マニラに戻る前に、短い休みを親族のいるマドリッドで過ごしました。彼は、マニラで、東アジア司牧研究所(EAPI)とアルペ・インターナショナル・レジデンスの霊的指導者となりました。次第に、健康を害し、これらの使徒職から手を引くことになり、2018年8月に東京に帰ってきました。

彼は、私たちが、「散漫」から「献身」へと進むように、たゆむことなく励まし続けました。去年の2019年7月、東京に彼を訪ねた時も、やはりそうでした。彼は、私たちにしのび寄る「散漫」の多くの機会に気づき、私たちの生活とミッションが浅薄になる危険を察知していました。

彼は、私たちが「和解と正義のミッション」への「献身」を望み、それ選ぶ唯一の方法は「自分を超えてキリストに焦点を当てることしかないこと」を常に思い出させてくれました。

アドルフォ・ニコラス神父を思い出す時、私たちが受けた多くの素晴らしいこと、とりわけ、我々の兄弟ニコの人生ゆえに、主に改めて感謝せずにいられません。彼は、こんにちも神の民への贈り物であり、そしてこれからも、このもっとも小さき本会（イエズス会）にあって、同じ主に仕える望みを持つ人々の光であり続けるでしょう。アドルフォ神父、ニコのため、祈りの願いを持って終わりたいと思います。

今や、彼は、信仰の刻印を押され、先に御もとに召された多くのイエズス会員たちに加わりました。彼らが、人生とミッションを生きる私たちのため、主に取り次いでくれますように。そして、私たちが、彼らと共に、キリストの熱い心で愛する1つの体であり、他者とその愛を分かち合うように召されていることを、さらに深く悟ることができますように。アーメン。

### 第1朗読 ローマ人への手紙 8：14～23

神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてください。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思えます。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。

### 福音朗読 ヨハネ福音書 12：24～26

はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」

### 説教の理解の助けとなる聖書箇所 マタイ福音書 13：18～23

「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。

茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。（ニコラス神父の働き）」

## ソーサ総長の説教（英語からの私なりの意識）

主において、親愛なる兄弟たちへ。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」 この御言葉は、十字架につけられ復活されたイエス、愛を証し、死から新しい命への道を開くイエスの人生のたとえです。また、ニコラス神父のようにイエスに従う者のたとえでもあります。彼らはイエスの友（フランス語の *compagnon* は一緒にパンを食べる間柄の人を意味する）になるために「この世で自分の命を憎む」方を選びます。イエスがされたように、死から命を取り戻す（悪の支配から私たちをあがなう）ために十字架を選びます。イエス様とは別の“もう一粒の麦”になろうとする人は、地に落ちて死ぬことで多くの実を結びます。地に落ちて死ぬ一粒の麦は、豊かな実りを生むために、それぞれの環境に根付きます。ニコラス神父は、このプロセスを生涯にわたって経験されました。彼の実り多い人生がそのことを示しています。彼は異なる時期、異なる土地で、一粒の麦として地に落ちました。異なる土地や文化に派遣されましたが、その土地でどう自分に死んで、どう環境に根付いて、どのように豊かな実を結ぶかを知っていました。派遣された場所場所で、ニコラス神父は環境に深く入る必要性を感じました。それはニコラス神父の人生全体を貫く特徴です。気が散っている人は、環境に根付きません。奉仕者は、もっとも報いや成果を生み出す、的を得た方法を探すよう絶えず打ち込まなければいけません。主がおられる土地にどう根付くか、方法を選ぼうとする人にとって、キリストに根付くことが一番偉大な挑戦です。他の全てのことは、神の愛に自分を委ね・放棄する信頼に拠っていて、それが人生の源になります。キリストに根付くことは、内なる葛藤を抱えることになります。それは、神の意思を探す基礎です。ニコラス神父は、神の意思を探し、それを自分の意思とするために、キリストに根付く挑戦を人生の終わりまで繰り返していました。彼は、困難だからと横に飛んで逃げたり、方向転換する誘惑にそそのかされたりはしませんでした。

「この世で自分の命を憎む」の御言葉のように、キリストに根付くために自分の思いを脇に置く必要があります、そうすることで神の前で真の人生が得られます。こんなこと、私たちにはできないように思えますが、神はニコラス神父の人生においてそれを可能にしました。誰でもキリストに根を張る人は、聖霊を受け、聖霊はその人を神の子にします。聖霊は、全ての隷属（欲望や悪習）から解放し、死から命に移ったイエスの共同の相続人になります。（参考聖書箇所 「子どもであれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共に栄光をも受けるからです。」ローマ8：17）

大胆な発言からもわかるように、ニコラス神父は聖霊のインスピレーションに従いました。彼は、恐れから自由な人の一人だったことを私たちは知っています。主の畑で養われて、彼の活動はよく根付きました。ニコラス神父は、しっかりとした霊の識別と聖霊の導きによって得られる知恵によ

って前進しました。彼の賢い識別のおかげで、イエズス会は有り余る恵みを得られました。それは、創造的忠実というイエズス会の元々のカリスマを発展させ、今の時代の要求に応えるミッションを果たしました。ニコラス神父は、彼に託された様々な責任を果たそうとあらゆる努力をしました。とりわけイエズス会総長として、会の使徒的働きを具体化するために努めました。第2ヴァチカン公会議以降の、イエズス会総会への要望と方法付けを具体化しました。彼は、イエズス会の行動様式を通して、教会に奉仕しようと努力しました。それだけでなく、ニコラス神父は、修道会の兄弟姉妹たちが、主との対話を深めるセンスが磨かれるようにいつも自分を役立たせました。

深く張った根は、止む事のない成長と多くの実りをもたらします。ニコラス神父は、人類の叫びを自分のものにする方法を知っていて、東から西へ、北から南へと橋を架けました。イエスのように、ニコラス神父は多様な文化に入り組む術を知り、彼ら彼女から学び、いつもグッド・ニュース：良き知らせを証言しました。彼は、人類が服従させられる誤りをかなり警戒していました。社会の端に追いやられて生活している、移住者と排斥された人たちの苦悩を直接知っていました。移住者と排斥された人たちの望みを「正義と和解」に結びつけて考えました。ニコラス神父は、人類が腐敗の隷属から解放されることは、輝かしい神の子としての自由を得ることだと理解し、それを希望に生きました。

私たちは、ニコラス神父が、普遍性と、地に足がついて生きた人として知っています。彼は、視野の広さと、人間の複雑さを見失いませんでした。いつも気取らず、地に足がついていて、普通の人との活動に参加する際には単純さを持っていました。ニコラス神父はとても聡明だった。彼の知性は、抽象概念に逃げるのではなく、関わる人を仲間として受け止め、具体的な生き方に深く入り込みました。とりわけ貧しい人をイエスの兄弟として大切にしました。彼は知性を、具体的奉仕への可能性へと変換しました。知性は、それぞれの状況を理解させ、聖霊からくるインスピレーションが働く余地を与えました。これから先もずっと、ニコラス神父という「地に落ちて死んだ一粒の麦」によって豊かな実りを手に入れるでしょう。彼の神への親しさが、彼の人生の様々な曲面から照らし出されます。誰に対しても会うひと全てに、彼は歓迎の微笑みを浮かべました。そして、困難にあっても平静で、複雑な状況でも打ちのめされることはなかった。どうか主よ、ニコラス神父によってもたらされた実りを喜びのうちに受け入れられるようにしてください。実りを味わい、私たちもまたイエスの弟子・仲間になれますように。

ニコラス神父の葬儀ミサを“道の聖母”の記念日の前晩に行っています。ラ・ストラ・タでの聖母マリアの示現（自叙伝 10）です。聖母への忠誠が、イエズス会を初めの時から今日まで鼓舞し続けています。このことは、私たちは巡礼者であることを思い出させます。そして、巡礼は一人で歩んでいる訳ではなく、むしろ聖母マリアに手を引かれて付き添われています。そして、父なる神への道を開く、彼女の息子イエスに従っているのです。私たちは、巡礼の道筋を詳しくは知りませんし、ニコラス神父も同様でした。ニコラス神父のような同志によって、巡礼の地図なしの歩み方を私たちは学びます。そして、道が開かれるのに必要なことは、その場で与えられる聖霊の働きに信頼することです。私は、御言葉との出会いと、イグナチオ的主との会話の席にあなたを招きます。ニコラス神父も同席して、彼の持っていたイエス・キリストと教会への徹底的な愛を分かち合っ

くれますように。息子イエスへの歩みを私たちがより早く遂げられるように“道の聖母”に助けを願います。そして、神への道を最大限に人々に示すことができますように。また、兄弟たち、主に語ります。イエスは十字架に架けられ、復活された方です。私たちに先駆けて自身を愛の贈り物として捧げ、和解をもたらしました。父なる神と共に、和解の恵みを理解できますように。ニコラス神父のとりなしで私たちが聖霊に満たされますように。すべてを新たにする使命の協働者に私たちがなれますように。アーメン。

## ソーサ総長の説教 英文

Dear Friends in the Lord. The grain of wheat that falls to the ground and dies to produce fruit, is the parable of the life of Jesus, nailed to the cross and raised, as a sign of the love that opens the way from death to life anew. It is also the parable of the followers of Jesus, of those who, like Adolfo Nicolas, choose to “hate their life in this world” in order to become his companion, that is, to occupy the same place that Jesus occupied, the redeeming cross as the entry into life. Of those who choose to become another grain of wheat that falls to the ground, dies and bears much fruit. The grain of wheat fallen into the ground dies to make it possible to take root and be nourished, in order to grow and bear abundant fruit. Nico experienced this process throughout his life. That is why it has been a fruitful life. He fell to earth at different times in his history. He fell into different lands. He always knew how to die, take root, grow outward and produce much fruit. Putting down roots was the experience that allowed him to acquire that awareness of the need to go deep, to penetrate all dimension of life. One who is distracted does not take root. One must constantly dedicate oneself to the task of finding the right nutrients for the growth that produces the most rewarding results. To be rooted in Christ is the first great challenge for those who choose to be planted in the ground where the Lord is. Everything else depends on this trusting abandonment into God’s love as the source of life. To be rooted in Christ is to participate in the “inner struggle” that is a basic part of the search for the will of God, in order to find it and make it one’s own Adolfo was able to go through this challenge many times until the end of his life, without sidestepping the difficulties or letting himself to be tempted to change course. To be rooted in Christ, it is necessary to become detached from oneself, “to hate one’s life in this world” in order to gain true life. This seems impossible to us, but God made it possible in Nico’s life. Whoever has taken root in Christ receives the Spirit that makes him a child of God, free from all slavery, a co-heir with Christ in the passage from death to life. We knew an Adolfo who was free – free with the audacity of those who have lost their fear of following the inspiration of the Spirit. Nourished by the soil of the Lord in which his roots were well planted, Neco advanced steadily in the discernment of the spirits and attained the wisdom of those who guided by the Holy Spirit. Through his wise discernment, the Society of Jesus received an abundance of grace to grow in creative fidelity to its original charism, responding to the demands of its contemporary mission. Adolfo made every effort, in the various responsibilities entrusted to him, especially as Superior General, to incarnate in the life and work of the apostolic body of the Society the demands and orientations of the General Congregations that followed the Second Vatican Council. He strove to serve the Church through our way of proceeding. He was always available to accompany his brothers and sisters in religious life in deepening that sense of total conversation to the Lord. Deep roots allow for unceasing growth and

bearing abundant fruit. Nico knew how to make the cries of all humanity his own, building bridges from east to west, and from north to south. Like Jesus, Nico knew how to engage diverse cultures, to learn from them, always giving witness to the Good News. He was well aware of the “failure to which humanity was subjected”. He knew first-hand the sufferings of migrants and the exclude, forced to live in the peripheries and the edges of society. He identified with their desire for justice and reconciliation. Nico lived with “the hope that humanity would be freed from the slavery of corruption to obtain the glorious freedom of the children of God”. We knew him as a person who was alive to a universality that was grounded. He never lost sight of the vastness and complexity of all humanity and was always down-to-earth in participating in the simplicity of ordinary people’s lives. Adolfo was very intelligent. All intelligence that did not lead him to take refuge in abstractions but to penetrate deeply into the concrete life of his fellow human beings, especially the poorest and that of his Jesuit brothers. An intelligence that translated into a capacity for concrete service because it understood each situation, and made room for the inspiration that came from the Spirit. For a long time to come, we will enjoy the abundant harvest produced by this grain of wheat which, having died to itself, has given so much life in the Spirit. His familiarity with God illuminated all aspects of his life. From this came his welcoming smile for each person or group he met, and all his serenity in facing thorny, tricky, or complicated situations without being overwhelmed. May the Lord give us the grace to receive with joy so much fruit produced by Adolfo Nicolas and know to savour it so that we too can become disciples and companions of Jesus. We celebrate this Eucharist in memory of Adolfo Nicolas on the eve the feast of Our Lady of the Way, the Madonna della Strada. A devotion that has inspired the Society since its beginnings. It reminds us that we are pilgrims, and that we do not walk alone, but rather accompanied by Mary who takes us by the hand, following her son Jesus who opens the way to the Father. We do not know the details of the journey but we have learned from companions like Adolfo that it is not necessary to have the map, but to trust in the one who opens the way for us and in his Spirit who reminds us what is needed at each moment. I invite you to turn this encounter around the Word and the table of the Lord into an Ignatian “colloquy”, first with Nico, our dear friend in the Lord, so that he may share with us his wisdom, his radical love for Jesus Christ and his Church. Then with Mary of the way so that she may help us walk more swiftly in the way of her Son and make the most opportunities that history opens up for us to show others the Way to God. I also speak with our brother and Lord, Jesus the Crucified-Risen One, who precedes us in the loving gift of self that brings about reconciliation. With God our Father, acknowledging with gratitude so much good received through Nico and begging him to fill us with his Spirit, to be collaborators in the mission of making all things new. Amen.